

金 学 鉉

民族·生·文学

——朝鮮文化論序說——



柘植書房

金 学 鉉

民族·生·文学

——朝鮮文化論序說——



柘植書房

金学鉉 (キム・ハクヒョン)

1929年韓国江原道原州市生まれ。

ソウル大学中退、日本中央大学大学院博士課程 (西洋哲学)

修了。現在、桃山学院大学文学部教授。

[主著・訳書]

『荒野に叫ぶ声—「恨」と抵抗に生きる韓国詩人群像』(柘植書房)、宋敏鎬『朝鮮の抵抗文学』(訳・柘植書房)、咸錫憲『苦難の韓国民衆史』(訳・新教出版社)、白樂晴他『第三世界と民衆文学』(編訳・社会評論社)、ジョン・C・H・ウ『東西の彼岸』(訳・中央出版社)

民族・生・文学

—朝鮮文化論序説—

1989年4月15日 第1版第1刷発行 定価2910円(2825円+税85円)

著者 金学鉉

発行所 株式会社 柘植書房

東京都文京区小石川2-24-7

齋藤ビル1F

電話03-818-9270

振替東京3-43287

印刷所 サコー印刷株式会社

製本所 有限会社協栄製本所

装丁・朴実

0030-32351-4819

「すべての歴史は現代の歴史である」と言ったのは、イタリアの反ファシズムの哲学者ベネデト・クロオチエである。この言葉の深い意味はよくわからないが、過去の歴史に現代性を見出すということよりも、現代において過去の歴史が体験されているという意味にとれる。今日、南北朝鮮の民衆は過去を「現体験」しつつ生きている。挫折と失意、そして抵抗の繰り返しの中で歴史をつくっていく。

十九世紀以来の、外部の侵略と内部の封建的秕政に対する二重の解放闘争において、多くの人が傷つき倒れ、民族の義の祭壇に祭られた。文化はその闘いと挫折の中で生まれた。時代の激動期、転機に芽生えた創造性、可能性は現実具体的に形をなしえず、葬られてきた近代百年余の歲月でもある。近代の夜明けから現在に至る、朝鮮民族が歩んできた道のりは、一言で言うと、恨との、自己闘争の過程であったといえる。南北分断の現状から脱して、一日も早く念願の統一を成し遂げ、別れ別れになった民が集い寄って、歓喜に満ちた宴をくり広げる日まで、現在の苦しみと闘いは続くであろう。

本書に収めた拙文は、その歩みの一端を理解しようとして試みたものである。主として八〇年代の韓国

における民主化運動に触発され、教えられて、そのつど時の動きに応じて書いたものをまとめてある。朝鮮民衆の生、民族の歩みが、読者諸位によって少しでも理解してもらえれば幸いである。

一九八九年三月十日

民族・生・文学

——朝鮮文化論序說——

／目次

I 民衆・文化

義・民衆 18

朝鮮の民乱 序説——十九世紀の民衆と蜂起 21

洪景來の蜂起と丁茶山 38

弥勒・張吉山 59

「人乃天」の思想と天主鬭争 76

韓国社会の变革と民族・民衆文化 88

抵抗・詩 100

II 民族・文学

日本帝国主義下の朝鮮文学 120

申采浩と民衆文学 138

沈黙の中で光明を待ちつづけた詩人僧 153

「恨」と抵抗の詩 165

分断時代克服への志向——文学作品にみる「分断」—— 201

民族文学覚え書き 217

朝鮮のキリスト教と文学 229

III 日本・韓国・朝鮮

教科書問題と「友好」の虚構 268

七五年の空白——「韓日新時代」に想う—— 277

日本の知性よ「義」の怒りを 290

韓国人にとっての韓日十五年 293

在日朝鮮人の文化創造 302

あとがき 316

I 民衆·文化

義・民衆

朝鮮の歴史の底を流れる基調を「苦難」に見出し、そこにキリスト教的な意味を求めているのは韓国の思想家咸錫憲氏である。歴史の一貫した流れというものをとらえる場合、おのずからそれぞれの立場や史観の相違によって異なってくるのは当然である。朝鮮の歴史を表面にあらわれた興亡盛衰の側面からとらえる場合、言いかえれば、王権等の権力の推移や外国の侵入などによる転変の歴史を客観的にとらえようとすれば、栄華衰亡、盛者必衰、権者必滅の「有為転変」が判然としてくる。しかし、このような歴史の裏通りでひたすらいのちをつなぐだけの生を生きてきたおおくの民衆にとって、有為転変あるいは「塞翁が馬」などの人生は無縁のものとして受けとめられたのだろう。

朝鮮の民衆はことに中世以後、日本の民衆とはちがう歴史の中で生きてきた。日本の民衆に限らず富める国の民衆とは異質の生活状況の中で、今日の言葉でいえば第三世界の民衆と共通する歴史を背負って生きている。民衆の歴史というものは国によって、時代によって異なるものであるが、民衆そのものの意味も一定していない。例えば現代においては「先進国」と「発展途上国」の民衆は、同じ

民衆ではない。かつてE・H・ノーマンはその著書『日本の兵士と農民』（岩波書店 一九四三年）の中でつぎのように述べた。「——日本の新しい産業家たちは、気ぜわしげにその若い産業と銀行の市場や投資の場を探し始め、軍国主義者らは市場と植民地を求めて自ら進んでアジア大陸に押し渡っていた。この侵略行動において、一般日本人は、自身徴兵軍隊に召集された不自由な主体（Agent）でありながら、みずから意識せずして、他の諸国民に奴隷の足かせを打ちつける代行人（Agent）となつた。」（大窪愿二訳）

日本の民衆のみならず、十九世紀後半から二〇世紀末の今日にいたるまで、強大国の民衆は国家権力の代行人となつて、「みずから意識せずして」他の弱小国の民衆を苦しめる主体となつたのである。一方は、内においては抑圧され搾取される民衆としてありながら、外に対しては抑圧し搾取する存在として、他方は、内からも外からもつねに苦しめられる存在としてありつづける。

一九八一年十一月AALAA文化会議出席のため日本を訪れたインドの文学者カーシーナート・シンは日本の作家との対談の中で（「現代インドの文学と民衆」『第三文明』一九八二年四月号）、日本人は都会人であつて民衆ではない、第三世界には一般民衆（貧しい生活に苦しんでいる、食べるものもないし、着るものもない、家もない）が存在する国がたくさんあるが、日本にはそういう民衆はもはや存在しないと云っている。富める国の民衆を従来「民衆」という概念にあてはめて考えることはできなくなつたが、民衆の意識においてもちがいは明らかである。民衆運動の思想——闘争意識——も当然ながら異なってくる。社会体制、身分制など民衆をとりまく環境の相違にもよるが、朝鮮における近代の民衆運動「民乱」、日本における百姓一揆を例にとつてみても、同じ民衆（貧しい農民）

として蜂起の理由は同じであっても闘争意識、闘争目標には明らかに相違がみられる。幕藩体制と中央集権的王朝のちがいも一つの理由であろう。

朝鮮における一八〇〇年代の相つぐ民乱と、これらが集約された形で爆発した十九世紀末の東学農民戦争とのあいだには勿論、意識の面で格段の差があらわれている。歴史上の反乱が現実的具体的な要求をかかげて起こったことは事実であり、きびしい身分制からの解放、人間としての解放を旨とする人類の普遍的要求に発展していったことも明らかである。人間としての根源的生の要求に加えて、民衆運動が一方で外国の侵略勢力とのたたかいが重なるという、すなわち内なる絶対王権の封建主義に反抗するたたかいと外勢とのたたかいを同時にすすめなければならなかった朝鮮の民衆運動は、世界史上きわめて特殊な位置をしめるものと思われる。国家権力にたいする確執と外国の侵略勢力にたいする抵抗とではおのずからその闘争意識、思想が変わってくる。前者があくまで現実的具体的な個々の欲望にもとづくものであるのにたいして、後者は個々人の生の領域を超越した民族国家全体の存在にかかわってくる。

多くの場合、朝鮮の民衆運動は挫折した。一時的には目的を達成したこともあるが、永続しえなかつた。東学農民戦争において頂点に達した民衆運動は文字どおり戦争に発展したのであるが、朝鮮民衆の外勢にたいするたたかいはこれにはじまるのではない。蒙古(元)にたいするたたかい、日本(豊臣秀吉の侵略軍)にたいするたたかいにその伝統の糸をたぐることができる。朝鮮民族は歴史以来、数多くの外敵の侵入とたたかってきた。人類の歴史はいわば相互間の戦争の歴史ともいえるが、戦争の主役は軍隊であることはむかしもいまも基本的には変わらない。中世においても日本の場合は

武士階級が存在し、ヨーロッパにあっては貴族階級がその主役をになった。いずれにせよ、支配階級は義務として国民を守るための戦士の役目を持っていたものである。

朝鮮ではまったく逆であった。古代は状況がちがうが、中世から近世にかけて、他国の侵入があると、困難に直面してたたかうのはほとんどの場合、民衆からなる義兵であり、王をはじめ支配階級は難を避けて逃げまどうばかりであった。国家の正規軍というのはあるが、あっても無きがごとくで、人民のためにはたたかうのはまれであった。高麗時代、蒙古の凶暴な軍隊が侵入した際（一二三一年から一二七〇年にかけて七次にわたるおよそ四〇年間）、草賊といわれた流民の軍団や下層階級の人々が抗戦し、後に蒙古に屈服した政府と官軍に反抗してたたかった三別抄軍（高麗武人政権期の軍で、左・右夜別抄、神義軍の三部隊からなる）も、その中心勢力は主として民衆からなる、義兵集団であった。おおよそ四〇年近いたたかいのあいだ王は江華島に逃げ、国土は荒れるにまかせ、民のことを顧みることなどなかった。

壬辰の年（一五九二年）の四月、豊臣侵略軍が釜山に上陸し、無人の境を行くがごとく一か月足らずしてソウルを陥れたが、官軍は逃げまどうばかりで、戦いに値するものはほとんどしていない。総司令官をはじめ將の多くはわれ先に逃走し、戦意を失った兵もあとを追った。王は一族郎党を引きつれてソウルを離れ、平壤へ難を避けたが、各地で日本軍に協力するものまであらわれた。なにひとつ恩恵を受けることのなかった民衆の反抗でもあった。七年間にわたる壬辰倭乱（文禄・慶長の役）は、それがまったくの敗北の戦争でなかったことは義兵によるところが大きい。敗走する官軍の背後で各

地方の儒生が義兵を募って立ち、民族的レジスタンスを果敢にくりひろげた。僧兵も立ち上がった。おもな義兵將に郭再祐・趙憲・靈圭（僧）・高敬命・金千鎰・惟政（僧）・金徳齡らがあり、かれらのもとに一族をはじめ農民、または流民が加わった。これらの義兵によるたたかいは大きな戦果は上げられず、荒野に義の血を流すだけであったが、困難に際して生命を投げ出したのはつね日頃疎外されている一般民衆であったのである。

朝鮮の歴史は義兵のたたかひの歴史においてもっと明らかにされなければならないと思うのだが、義兵とはなにかについて歴史家朴殷植は『韓国独立運動之血史』（一九二〇年）の中でつぎのように書いている。「義兵は民軍である。国家の危急に際し、ただちに義をもって蜂起し、政府の命令、徴発をまたずして軍務に従事し、敵と対決したものである。わが民族は、伝統的に忠義の心があつく、三国時代以来、外敵の侵略に対し義兵が蹶起して勲功をたてたことがきわめて顕著である。李王朝の宣祖時代に倭寇の蹂躪をうけた八年の間、儒者、郷紳、僧侶のようなものまでが、みなふるって草野に蹶起し、少しも正規軍の助けを借りたことはなかった。これらの義兵は、忠義心をもって民衆を激励し決死的に抗戦した。……換言すれば、義兵はわが民族の精華であるといえよう。」（姜徳相訳）。民族・国家が危機にひんしている時、義をもって立ち上がる民衆、忠義の心が義兵の中心思想としてあげられるが、一方ではたんに主君や国家にたいする忠節とか忠誠とかいうものによるのではなく、民衆自身の義の行為としてあらわれてくる。

一八九四年正月（旧暦）、東学農民戦争の発端となった全羅道古阜郡庁の襲撃後、農民軍の大将全準は「輔国安民」の旗じるしの下、全国に檄文（ピラ）をとばした。檄文は「われららが義を挙げて

ここにいたったのは、その本意が断じて他にはなく、民を塗炭の苦しみから救い、国家を盤石の上にすえようということにある。——として、義挙の目的を明らかにした。この概文には「義」の意味がよくあらわれている。義が一方で忠君愛国というある対象に向けられる人倫にもとづき、一方では苦しむ民衆を救うという現実的具体的な行動倫理として明示されている。東学農民戦争が「反帝」「反封建」という二つの大きな理念をかかげてたたかっていた義のたたかきであるのは周知の事実であるが、韓末（一八九七年から一九一〇年までの李朝の国号「大韓帝国」の末期）の二次にわたる義兵闘争は「反封建」よりも日本帝国主義にたいする、「反外勢」の側面が強力な思想的背景をなしていた。この時期の「衛正斥邪」思想は朱子学の正統をかたくに護持しようとする儒者、当時の知識人たちによって民衆のあいだに深く浸透した。まもるべき「正」は朱子学イデオロギーの伝統、正統性であり、確固たる王権体制の確立にあった。排斥すべき「邪」は、「斥倭」「斥洋」にみられるように外部の侵略勢力である。「衛生斥邪」においては義の一面しかみられない。ここに韓末の義兵闘争の限界があったものと思われる。儒教的義の觀念が支配的であり、きびしい身分制の上に立つ儒生の特権意識が作用し、人間解放のための義の論理が欠如していた。

ともあれ、義兵の存在は朝鮮の歴史に大きな足跡を残した。外部の侵入、侵略があるたびに決起した義兵の伝統は「日韓併合」後も絶えなかつた。その伝統は解放後の今日まで受けつがれているといつてもいい。東学農民戦争、韓末義兵闘争に参加した人々はその後の抗日独立戦においても中心となつて活躍した。義兵の精神的系図をたどると確かに第一義的には、国難という客観的状况にたいする義理の表出があげられる。それは、上層部の儒生においても下層の一般民衆においても共通する国家

への義務感である。しかしそれは同時に、徹底した儒教社会におけるきわめて自然な形における人間の履むべき道理、人倫のあらわれといえる。

「義」という言葉は明らかに儒教社会、封建社会の言葉であるが、義とか「義理」という言葉がとくに意識されてくるのは、二つの面から考えられる。一つは国家社会の乱れであり、他の一つは人間の普遍的な生の要求が踏みじられるときである。安定した、平和な社会にあつては、義はさほど問題にされない。義の真価が輝いてくるのは乱世においてである。言うまでもないが、人道から外れる諸々の外圧が激しくなればなるほど、義は光り輝く。

ところで、「義」について、「大言海」ではつぎのように解釈してある。「①五常の一。行為ノ宜シキニ合フコト。正道ニ仗ルコト。誼。②確ク正シキ理ヲ守リテ行ヒ、一身ノ利害ナド顧ミヌコト。③ワケ。ココロ。意味。」一方、韓国の『国語大辞典』（李熙昇編 民衆書林）には、「①おのれの利益を考えず、人道のために尽すこと。②正しい行為。③他人と骨肉の関係を結ぶこと。」、朝鮮民主主義人民共和国の『朝鮮語辞典』（科学院出版社）では、「①人として行うべき正当な道理。②骨肉でない人と結ぶ骨肉と同じ関係」となっており、日本と朝鮮における義の解釈は儒教的義の概念をとっている。さらに「義理」についてみると、「大言海」では「①義ノ理。人ノ履ミ行フベキ、正シキスヂミチ。②ワケ。ココロ。意味。③人ノ交際に務ムブキ道——」、前掲の『国語大辞典』、『朝鮮語辞典』では、人間として当然守らなければならない道理、信義を守らなければならない交際の道理、という意味にとっている。ところが、『国語辞典』（岩波書店）には「①世の道理。②人として